The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京極歌風の問題点
Author(s)	大坪, 利絹
Citation	語文. 1971, 29, p. 33-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京極歌風の問題点

大坪利絹

一

玉葉・風雅両勅撰集の中核を構成する京極歌風に対する現代の和歌史的評価は、十三代集中にあって、その沈滞の因習を破った生新なる一風といふことで略々異論なき様に見受けられる。(1) 特に近時、たとへば宋詩との関係、(2) 共感覚的表現、(3) 特異句使用等々の側面よりその歌風研究が深化され、従来の成果がより精密に練り上げられつつある。京極歌風の斯様な美点は、二条歌風の所謂平板温雅なそれよりも、一層近代的感覚に適合し、評価を高からしむる美質として決して否定せられるべきものではない。が併しそれは一応それとして、改めてその作品を反読してみる時、そこに一抹の翳りの射すのも、あるいは私一個の幻覚かも知れないが否定することはできない。といふのは、京極歌風の清新性といふ観点は、その前提があくまでも十三代集の他集、つまりは二条派系との比較に立ってのそれであって、京極歌風のいはば内部比較といふか、その内部に包蔵されてゐる一種の弱点を批判する時、現代の評価には見落されてきた側面があるやうにも思はれるからである。言ふまでもなく近代以前における両集への批判は、たとへば「玉葉風雅の二集の異様なる歌のふり（藤井高尚・歌のしるべ）」「風雅は当時もてあそばぬ集（細川幽斎・聞書全集）」「風体わろきは風雅集、歌のわろきは玉葉集（群書一覧所引、三光院の言）」「先祖代々の風をそむき、累葉家々の義をやぶりてよめる歌・詞をかざらず物がたりをするやうによめる、いまやうすがたの歌（野守鏡）」等の如く、近・中世へと時代を溯行すればする程、辛辣度を加へていったことは周知の通りであるが、これらの批判を単なる反対派の攻撃として無視するよりも、京極歌風の美質を正当に認識する上に役立たせた方がよいのではないかと考へるのである。併しこれらの批判は歌風に就いては、必ずしも一一の歌に即して、具体例を挙げて述べてゐる訳ではなく、多分に漠然たる反対のための反対の感がないでもない。そこで私はなるべく具体的にその問題点をとらへて所見を述べてみたいと思ふ。

二

京極歌風に内包された弱点の一つは、発想および表現の類似といふ点である。

㋑夕日影田面遥かに飛ぶ鷺のつばさのほかに山ぞ暮れぬる
（風雅・光厳院）

この歌について安田章生博士は「この鷺は、白鷺であり、一羽でなければならないと思われる」と言はれた。[5] これは或は博士の鋭い感受力と詠歌修練による歌人的直観によって述べられた文言であるかも知れないが、私にはそれ以上に学者的研究が基底にあっての立言かと思はれる。博士はこの歌をこの著述の性格からみて秀歌として取扱はれて居り、上述に続いて精細な鑑賞を示されるのであるが、拙稿では右の部分を引用させていただければ十分である。茲に揚げ足をとる者が居り、鷺が白鷺であり一羽である論拠をこの歌のどこに見出し得るか、鷺が例へば五位鷺であり、複数で群を成して飛翔してゐたら何故いけないのかと反問すれば如何。この反問がこちたき理屈であるとすればその所以を明確にしなければならぬ。それには他の類歌をもってするのが一番よい。国枝利久氏は㋑歌の類歌として、

㋺田面より山もとさしてゆく鷺のちかしと見れば遥かにぞ飛ぶ
（玉葉・伏見院）

を指摘されてゐる。[6] 確かに用語のみを比較しても田面・遥かに飛ぶ・鷺・山と類似が多いし、又一首の情景も類似する。違ふ所は、時刻が不明なのと光線の持続性に乏しいといふ点ぐらゐであらう。ただこの㋺歌からでは鷺の種類や数は依然として不明である。従って当面の問題を解く為には他の類歌を探さねばならぬのであるが、その為にもこの㋺歌の性格をもう少し吟味しておかねばならぬ。井上豊氏はこの歌について、下句に「写実の妙があり」[7] とされ、土岐善麿博士も「玉葉写生歌の極致」[8] とされるのであるが、詞書によれば「題をさぐりて人々歌つかうまつりしついでに、鷺を」とあり、実景の写生と考へるよりも、むしろ観念化した光景の言語化と考へる方が探題歌の実際に合致するのではなからうか。つまり㋺歌の性格は写実の歌といふよりも観念の歌ではないのだらうか。小西甚一博士は、斯様な傾向の歌について、「頭の中で考えた」「観想的な歌」とされ、これを「説明型描写」と名づけられてゐる。そして「〈清新澄明な写実性〉といった評語で割り切っていたことにいくらか修正を加えたいところがでてくる」と言はれ、「秀歌」といふより「同じ性質の表現でありながらむしろ〈失敗作〉と評した方がよく当る」とも言はれてゐる。[9] さて土岐博士は、㋺歌と㋑歌とは「たぶん同じときの叙景であろう」とされるが、仮にさうだとすれば㋺歌の時刻も類推可能になるが、私はこの㋺歌の性格を観念の歌と規定するが故に、同じときの叙景と言ふより、ある原歌（例へば流派の指導者や、宗祖の作った模範的例歌）を粉本にして作った観念化された類歌と見たいのである。かういふ性格を附与した上で㋺歌に類似した作（つまり、㋑歌にも類似する作）をさらに求めてみると、

㋩つらゝゐる苅田の面の夕ぐれに山もと遠く鷺わたるみゆ
（玉葉・前参議雅有）

㋥ながめこす田のもの上ははるかにて鷺つれわたる秋の山もと
（伏見天皇御集）

㋭みどり濃き日影の山のはる〴〵と己れまがはず渡る白鷺
（風雅・徽安門院）

㋬夕立の雲飛びわくる白鷺のつばさにかけて晴るゝ日の影
（風雅・花園院）

㋮山もとの田面より立つ白鷺の行くかた見れば森のひとむら
（風雅・伏見院）

等が有り、かう並べると一見して、その素材の類似と情景構想の類

同的なことに驚かざるを得ない。鷺を詠じた歌などは一寸考へれば勅撰集中に例多しと考へ易いのであるが、[10]稲田利徳氏の指摘によれば、案外少ないのであって、金葉・千載・新千載・新続古今に各一例あるだけで、あとは玉葉に四例、風雅に八例の計十六例にすぎないのである。[11]こゝで京極系の歌集に特に多い理由は、京極派が新しい素材に特に着目したといふよりも粉本を敷写すといふ詠作の姿勢によるものであると思ふ。かくして、これらの類歌を考慮すれば、㋑歌に詠まれた鷺は、或は実際には、田面遙かに飛ぶ鷺が五位鷺であったかも知れぬといふ疑問があるとしても、これを「白鷺」と論断された安田博士の意図は㋓㋩㋛等の歌からも肯定せざるを得ぬのであって、換言すれば安田博士の断定は、京極派の斯様な詠作態度を暗黙の裡に認められての結果であらうと思ふ。京極派の歌の特色の一つに挙げ得る色彩の対照美といふ点より見ても、実体は五位鷺でも、表現効果上白鷺と考へる方がよいと思ふ。さらに思ふに安田博士の㋑歌に対する論断の根拠は、多分に㋓歌を深層意識に持たれてゐた為ではないだらうか。何故かとなれば㋓歌の「己れまがはず」といふ表現に「一羽」といふ印象を強く感受されるからである。井上氏も「おのれまがはずはおのれひとりまがわずに」の意だとされてゐる。[12]そこで、これら一連の類歌のどれが私のいふ粉本的原歌に果して相当するかといふ事が当面の課題となるのであるが、井上氏は㋓歌は、

㋐夕立の雲間の日影はれそめて山のこなたを渡るしらさぎ

（玉葉・前中納言定家）

から「影響をうけている」とされた。[13]併しこの㋐歌は、㋓歌に影響を与へたのみならず、川田順氏によれば㋩歌にも影響を与へてゐるらしく「定家のこの作も佳什なり。これは同じく雨後の白鷺を捉へ来って、背景の山の緑と対照せしめしなり。院の御製（㋩歌ノコト）の方、さらに複雑の美多しと拝誦す」と述べてをられる。[14]ただ川田氏は㋩歌の白鷺を「夏日の晩、雨将に過ぎんとして、その雲の中を翔けり分くゆく白鷺の一群、その翼には早くも雨後の日光映ずるを見る。実景観る如くにして、美しき御詠なり」と述べられるが、私は「一群」としなくても「一羽」でも上述類歌から考へてよいと思はれ、土岐博士も㋩歌の白鷺について「夕立に洗われた山野は一時に生気をみなぎらして、かがやくばかりの中に、一羽、おそらくはそれは今しも晴れわたる天地の中心というような印象をもって、白鷺が飛んでいるのである」と、一羽説をとられてゐる。[15]又川田氏が㋩歌を「実景観る如く」と実景描写歌のやうな見解をとられてゐる点もどうかと思はれるのであって、私は㋑歌から㋛歌まで一連の京極派の類歌を眺めてきて、確かに二条風的な作品に比べて、「生新の一風」は認められはするものの、京極歌壇内部に於てはやはり前述の如く或る粉本的原歌を基底とした観想的模倣歌とでも言ふべき一種のマンネリズム化を否定できぬと思ふのである。以上、私はこれらの類歌に対する粉本的原歌とは明らかに㋐の定家歌を指すと考へるのである。この㋐歌は井上氏の如く㋓歌にだけ影響を与へたと考へたり、川田氏の如く㋩歌にだけの影響と考へたりすべきものでなく、これらの類歌のすべてに影響を与へてゐると考へるべきである。現に上田英夫氏は、私の如く粉本的原歌とはせられないが併し、定家のこの㋐歌と㋕㋓㋛歌とを類関係として考へて居られる。[16]

それでは一見して歌論用語上の所謂「同類」に当るかと思はるかくの如き傾向を、何故に京極派は避けようとはしなかったのであら

うか。これは考察しておくべき問題であらう。京極派の領袖為兼は、その和歌抄で「いにしへにたちならはんと思はゞ古におとらぬところはいづくよりいかにぞすべきぞとかなはぬまでもこれこそ委しき大事にてもあるにたゞ姿詞のうはべをまなびて立ちならびたる心地せんは叶ひ侍りなんや」とか「その心にはおちゐずしてうはべばかりをまなびてわざと先達の読ぬ詞をよみ同事をもよまんは返々無其詮」と一応は模倣を否定するのであるが、反面「万葉の比は心のおこる所のまゝに同事ふたゝびいはるゝをもはゞからず」とか「是にたちならはんとむかへる人々の心をさきとして詞をほしきまゝにする時同事をもよみ」とか「同事ふたゝびあるも人によりて晴の哥合にも難ぜず」と肯定的に取扱ったりもしてゐるのである。（ここの「同事」は普通三十一文字中に「同事」を詠む意と考へられてゐるが[17]類歌関係の意にまで拡大することも許されるであらう）これらを考へると私は、その理由は実に当時の歴史的環境にあったと思ふ。即ち京極歌壇では二条派との拮抗上、宗祖への傾倒は絶大で、それが歌書や歌論書の伝授問題や勅撰集撰進時に於ける形式体裁面等にもうかがはれ、正統継承意識の宣揚は必須の課題であった。北朝の立場にある京極派が和歌の面に於ても、正統性宣揚の精神を打出す事は絶対至上の使命であり、風雅集の序文や詞書の記載形式、撰者推定の問題も、かういふ意識を無視しては正鵠を失するのではないかと言ふ事は前号で立論したが、撰集の内容面の考察に当ってもこの事の持つ意味は重いと思ふ。この同類歌的傾向は、京極派の正統継承性（大きく言へば北朝の正統性）宣揚といふ大命題の下に於ては取り下げるにも取り下げ得ない理由が存したので、ここに京極派の悲劇的宿命と言ふか、歴史の皮肉があった様に思ふのである。

三

㋑歌から㋒歌まで一連の類歌では、広い山野や田面の上空を悠々と翔けり行く白鷺といふイメージが浮かび、空間の広さ・色調対比の鮮かさ・時間のゆるやかな推移がその基調となってゐるが、一首の構成素材となってゐる用語を一つ二つ交換してみても、イメージの基調の類同性は変はらないのではなからうか。例へば飛翔する鷺を、雁と交換すれば、

㋬あくる夜の田面の霞分けすぎて山もとわたる春の雁がね　（玉葉・雅有）

すぐかういふ歌にならう。この「山もとわたる春の雁がね」は、同じ作者による前記㋓歌の「山もと遠く鷺わたるみゆ」と比べてどれ程の違ひを見出し得るであらうか。しかも「田面」に対しては「苅田の面」と、あまりにも類似し、単なる作者の好みとか傾向とかいふことで打ち捨てることのできぬ面を持ってゐるやうである。流派の志向を勘繰りたくもなる。さて又、この㋬歌の「あくる夜」からは薄明の光景の印象を受けるが、薄明ならば「夕暮れ」がすぐ連想されよう。さらに「雁」を一般化して、「鳥」といふ語に転換すれば、㋬歌から

㋟夕ぐれの霞のきはに飛ぶ鳥の翼も春の色にのどけき　（風雅・伏見院）

があまり苦労なしに出来るのではなからうか。（但し今は、歌作の前後問題でなく、詠作態度の安易さとマンネリズム化を取上げてゐるのである）さらに

㋠雲遠き入日のあとの山きはにゆくとも見えぬ雁のひとつら

（風雅・花園院）

わ雲間もる入日の影に数見えてとほぢの空を渡るかりがね

（風雅・関白右大臣）

も類想歌として極く自然に首肯できよう。もっともを歌は秋部の歌であるが。かく考察しきたれば、前述㈡の安田博士の鑑賞にあった「一羽でなければならないと思われる」といふことも、一応は首肯し得るものの、断定しきることは躊躇せざるを得なくなるのである。前のヘ歌に於ける一群か一羽かといふ、川田氏と土岐博士の鑑賞のズレもこのあたりに起因するのではなからうか。川田氏はこのを歌の参考として、倭漢朗詠集の「一行斜雁雲端滅　二月余花野外飛」を挙げられたが[18]、「雲遠き」や「ゆくとも見えぬ雁のひとつら」には確かに「一行斜雁雲端滅」の趣がある。斬様に京極歌風には漢詩的発想もまま見受けられるのである。なほ、土岐博士は、このを歌に対して、

秋の夜の空すみわたる月なればゆくともなくてかたむきにけり

（玉葉・大江嘉言）

更けぬれどゆくとも見えぬ月影のさすがに松の西になりぬる

（玉葉・後二条院）

の二首を挙げて、「雁と月との相異である」と言はれてゐるが[19]、これは私の「構成素材を一二交換してもイメージの基調の類同性は消えない」といふ見解と全く軌を一にするものである。更に、

か雲居ゆく翅もさえてとぶ鳥のあすかみゆきの故郷のそら

（玉葉・土御門院）

といふ歌なども、枕詞や掛詞の使用は、どちらかと言へば京極派的技巧とは言ひ難いが、その枕詞や掛詞も単なる修辞に終はらずして実質的な意味内容を負担させてある点やその発想等も案外京極歌風の栄養源となってゐるやうな気がする。土岐博士は「鎌倉室町秀歌」の序説で、玉葉集を論じて「歌数がそれほど多いということは、（玉葉集二十巻二千七百八十余首ノコト）一種の偉容をしめすものではあるが、それだけにまた、同じ傾向の作品が、ある程度の標準のもとに、ずらりと並んでいるため、傑出したものを選別することは容易であると共に、全体としてはやや退屈な歌集であることも否み難い」と述べられてゐるが、京極派歌人の詠作傾向をやや注意深く点検すれば、土岐博士のこの文言は直ちに首肯出来るところである。

四

京極歌風に於ける叙上の如き類同性を有する歌は、この他にも比較的多く見出されるが今はもう一つ類例群を挙げてこの叙述を打切りたい。

よあともなき賤が家居の竹の垣犬の声のみおくぶかくして

（風雅・花園院）

た小夜更けて宿もる犬の声高しむらしづかなる月の遠かた

（玉葉・伏見院）

れ音もなく夜は更けすぎて遠近の里の犬こそ声あはすなれ

（玉葉・従三位為子）

右の三首をみて、その情景のイメージが頗る相似することを否定し去る人は少いであらう。村里の犬の吠声が、和歌的素材として詠ぜられることは川田順氏の指摘[20]のやうに後掲の万葉歌以来珍らしいことである。この珍らしい素材を取入れたのは、おそらくは他ならぬ定家その人ではなからうか。

㋞里びたる犬の声にぞしられけるたけより奥の人の家ゐは
（玉葉・前中納言定家）

玉葉集のこの歌は文治三年の閑居百首のものである。この歌が粉本となって㋚歌が詠まれたであらうことは、犬の声・家居・竹・奥等の諸語の一致よりみて疑ひなき事と思はれ、又㋟れ両歌もその発想はこの定家歌が根拠となってゐると見ても、さきの「白鷺」の類歌群の場合を思ひ浮かべる時、首肯し得るであらう。もっとも定家が斯様な素材を取上げた理由は、別に考へねばならぬ所ではある。その理由は他にもあると思ふが、私は一つにはやはり漢詩からの影響かと思ふ。漢詩に於て「犬の吠声」がどのやうに取上げられてゐるか、残念乍らこれも精細は未調査だから不明なのであるが、日本漢詩ではあまり多く見かけられないやうに思ふ。例へば、「類聚句題抄」の藤後生の作に、

偏以天時宜野望　更教風客不家居
桃源問路遙聞犬　柳渚点煙只遇魚

といふまことに春風駘蕩たる詩があるが、家居とか路遙聞犬など用語に稍共通するものがある。思ふに、京極歌壇に於ては、宗祖定家の歌を粉本として、書道に於ける臨模の如き精神でもって盛に詠作練習が課せられたのではなからうか。或いはある情景を、所謂連作の如き方法で人数を複数にして詠み上げたのではなからうか。或いは又、心理学上の所謂残像現象的な効果を狙ふ為に、一つの情景を複数の角度から詠みあげるといふ方法を和歌の上で実験したのであらうか。詞書にも「万葉の句をもとにして詠ず」といふ風なのがかなりあるし、かつて佐竹昭広氏が述べられた表現の特殊性、即ち、[121]

万葉集の詞にて詠ませ給うける御歌の中に、たづ渡る見ゆと云ふ事を　伏見院御製
海原やおき漕ぎくれば夕汐の干かたの浦にたづ渡る見ゆ
（新千載・雑上）

等の「見ゆ」で結ぶ古代和歌独自の類型を使った作品が、京極派の歌にみられるのも、以上の私の想定を裏づけてくれる。また、

㋡行き暮れて宿とふ末の里の犬とがむる声を知べにぞする
（風雅・和気仲成朝臣）

の如きも、多分今述べた様な場が基盤となって制作された歌[122]かと思ふのであるが、万葉以来稀なりと言はれる「犬の吠声」の如き素材が、さきの「白鷺」の場合と同様かく京極派に集中的に多く見られるのも、既述してきた京極派の詠作態度を想定する根拠になるかと考へるのである。

では何故斯様な珍素材を定家は拾ひ上げたのか、又その定家歌を京極派がバックアップし、二条派は却下した理由は何であらうか。漢詩の影響かといふ点は一寸触れたが、それ以外にこの事を少し考察してみたい。㋡歌では里のありかの「しるべ」を犬の吠声に求めてゐるが、従来の和歌に於てはかういふ場合の「しるべ」は何であったか。私の調査の結論を言へば、[123]まづ「里」は山里や村里でなく古今集の小町の歌以来、蜑の住む海辺の里であり、その「しるべ」は蜑の焼く藻塩の「煙」で、その煙には恋の恨のイメージが重ねられてきたのであった。その浦見の辺の里が山里や村里にまで、里の解釈が広められ、それにつれて「しるべ」の方も、煙から、千鳥の声、秋風、紅葉や卯の花、砧の音や鐘の音に拡大され、イメージも「浦見」を掛けた恨みの恋から、旅行の困難といふイメージに変化してきたのであった。おそらくこの転換は和歌以外からの刺戟の為

と思はれ、その刺戟の一つは散文からであると思はれる。「犬の吠声」が散文的素材であったことが二条派の忌避の理由であらうと思はれる節がある。

寺々の鐘の音けふもくれぬとうちしらせ人をとがむる里のいぬ、

声する程に夜はなりぬ。柴おりくぶる民の家けぶりたえざりしも

田づらをへだてゝはるかなり

この平治物語下、「常葉落ちらるる事」の一節などは、㋕㋖㋗の諸歌の情景イメージと合致し、特に㋗歌の情況説明文として提示しても何等奇異の感はないと思ふ。また、

昼ハ野原ノ草ニ隠レテ、露ニ臥鶉ノ床ニ御涙ヲ争ヒ、夜ハ孤村ノ辻ニイテ、人ヲ尤ムル里ノ犬ニ御心ヲ被ル悩、何クトテモ御心安カルベキ所無カリケレ（太平記巻四・大堪宮熊野落事）

の一節も、類似の表現であるが、これ又上述の諸歌のイメージとも一致する。

次にかういふ素材に二条派は冷淡であり、京極派が積極的であった理由の第二は、それらの素材がまた連歌的であったといふ点である。例へば十訓抄第三の八「俊成卿の娘の連歌」にみえる

花を見すてゝかへるさるまろ

星まぼる犬のほゆるにをどろきて

といふ唱和をめぐる説話など、おそらく歌人仲間では有名であったのであらうが、やがて

犬はとりわけ（ィとりわき）僧を吠えけり

宇治山のきせんくんじゆの其のなかに　（誹諧連歌抄）

さる児とみるよりやがて木に上り

犬のやうなる法師来た（ィ来ぬ）れば　（犬筑波集・雑部）

などの俳諧の連歌となり、それはまた「きのふはけふの物語上」や「醒睡笑巻六」所収の笑話となって伝へられてゆくといふやうな事態である。即ち、漢詩には猿の啼声、和歌には鹿の啼声が常套素材であったのに対し、連俳ではそのパロディとして犬の吠声が多分取入れられたものかと思ふが、京極派はこのやうな非和歌的素材を進んでその和歌素材に取入れたのである。修辞技巧上でも、例へば第三句を、て・にて・して等でとめるがごとき、連歌に多い修辞が計量的にも多いのであるが、彼等は連歌的要素の和歌領域への浸潤などは二条派ほどに慎重でなかったのであらう。その証左として次の連歌を示したい。

とまるべき里はさすがに知られけり

犬の声する道の末かな

おくふかく道をゝしへのたよりにて

犬のこゑする夜〻の山ざと

前者は菟玖波集巻第十九雑体連歌に所載の大納言尊氏のもの、後者は新撰菟玖波集巻第十四雑二に所載の権僧都心敬のものである。これらの連歌と、さきのよたれそ等の和歌との間に何程の差異を認め得るであらうか。後者心敬の連歌は、定家のそ歌の本歌取であるといふ指摘もあるほどである。[24] 和歌と連歌との近接はやがて勅撰集終焉の兆候であらうが、斯様に和歌の精気は連歌に吸奪され俳諧へと昇華してゆく傾向をもつのであった。

舟こぐ浦は紅の桃

唐国の虎まだら毛の犬吠えて

この菟玖波集巻第十四雑連歌三所載の性遵法師の連歌などは、一面では以上にみた京極派の連歌的な傾向の和歌との共通面を、他面で

は前述の古今集の小町以来の伝統的な和歌との共通面を併せ保ちつつ、

名護屋ニ入ル道の程諷吟ス

草まくら犬もしぐるゝか夜の声　（甲子吟行・阿羅野）

といふ芭蕉の俳諧へと継承されて行ったのだと思はれるのである。もともと、犬の吠声を詠じた万葉歌、即ち

赤駒　庇立　黒駒　庇立而　彼乎飼　吾往如　思妻　心乗而　高山　峯之手折丹　射目立　十六待如　床敷而　吾待公　犬莫吠行年

（巻十三・三二七九番）

といふ長歌自体が、沢瀉久孝博士や土屋文明氏の説に従へば、民謡的な男女のかけあひに適するやうに作られた歌なのであった。万葉集中犬の吠声を扱った唯一例のこの歌が、かけあひ的な、換言すれば連歌的な性格を持つものであってみれば、二条風的な「温雅平板」の目からは冷淡視さるべき運命を最初から担ってゐたのである。従ってかういふ素材を受け入れた京極歌風が〈当時もてあそばぬ・わろき・いまやうすがたの・異様なる歌のふり〉であると批難されることも当然であった。而して京極派はかゝる批判を受け流し、

㋔里の犬のこゑをきくにも人しれずつゝみし道のよはぞ恋しき

（光厳院御集・恋）

と歌域を恋歌にまで広めて憚からないのでった。

五

以上私は縷縷と具体例に基づき京極歌風がいかに類同的であるかを述べ来ったが、茲にその理由を考察したい。前記㈡で触れた如くそれは多分に政治的背景に由来する所ありと思ふのであるが、今一つ、当時の京極派首脳陣の下部に対する統御性の面より具体的に二三論証してみたい。

第一。一体、二条派から勅撰集撰進といふ流派としての主導権、それは当時にあっては政権とかなり癒着したものであったこと論ずるまでもないことながら、左様な権力を取得した京極派としては、わが流派から可能な限り多くの人と歌とを勅撰集に撰入して一挙にその力量を誇示したく思ふのは人情の常であるし、又政策的にも有効な方法であったのであらう。玉葉集は、おそらくかくして二十一代集中の最大歌集となったものと思ふ。歌数は勿論、歌人の域も自派および、自派の主張や傾向に近い歌風の人に拡大せられたのであらう。即ち二十一代集中にあって、玉葉集のみにしかその名を見ない歌人は、勅撰作者部類によって調査算出したところ、百十三名の多きを見るのである。又その中、唯一首のみの入撰によって勅撰歌人たる栄冠を得た者は八十八名にものぼる。さらにこれを風雅集に及ぼせば如何。風雅集のみの入撰歌人数は九十名を算へ、その中一首のみで勅撰歌人になりし数は六十九名。これに加ふるに風雅に初出し以後勅撰歌人になりし者八十六名を算へ得る。この他、玉葉と風雅の両集だけへの入撰歌人十三名。次いでまづ玉葉に、中間の二集では名を消して再び風雅で名を出して以後勅撰歌人になる者八名である。十三代集全部について以上の如き調査を行って比較すればこれらの数字のもつ意味がさらに鮮明になると思ふが、勅撰作者部類を少し繙くだけでも他集ではこれ程にならぬことの予想可能はまづ間違ひないかと思はれる。斯様にして、とにもかくにも玉葉風雅の二集なかりせば勅撰歌人の栄誉を担ひ得なかった歌人が二百十六名にも上るといふ事は、京極派的勢力をでき得る限り拡大しようと

企図したものと言ひ得るのではなからうか。少なくとも二条派に対する量的優位性の顕示であり、反面質的吟味を十分加へ得なかった事を物語るものと思ふ。

第二。玉葉集の詳細は未調査だが、風雅歌人群の調査の中、第一で言及した京極派勢力に関する調査結果をいくつか左に示さう。

(1)風雅全歌人中の、初出勅撰集別人数と風雅入集歌数。

初出集名	入集人数	入集歌数
	(人)	(首)
万葉	4	16
古今	8	38
後撰	10	16
拾遺	22	44
後拾遺	21	50
金葉	16	46
詞花	9	66
千載	42	214
新古今	17	61
新勅撰	23	73
続後撰	20	70
続古今	20	77
続拾遺	20	150
新後撰	58	357
玉葉	48	227
続千載	44	95
続後拾遺	9	38
風雅	176	516
計	567人	2154首

右表から、風雅集に於ては、当代人によってその歌人数と歌数とを大胆に増加させてゐることが判然とする。即ち風雅集に名の見える歌人五百六十七名中百七十六名が当代人である。なお読人不知歌の五十七首を右表の二千百五十四首に加へて都合二千二百十一首がその総歌数である。千載や新後撰の初出歌人や歌数の多いことも右表で判るが、これはその二集の直後歌集、即ち新古今玉葉に活躍する歌人が、直前歌集から活躍しはじめるといふあの風巻博士が、新古今に試みられた所説[29]と契符を合する事実であって、風雅集序文に見える新古今憧憬精神の一つの具現であらう。この種の歌人には例へば定家・永福門院が相当する。風雅集にかういふ系列の人の歌数が多いといふことは、さきの宗祖尊重による正統性継承意識の具現、並に京極派歌人を顕彰する精神の具体的な表現と見得るが、この事は次の(2)表からもはっきりと断言できる。

(2)風雅集に十首以上入集歌人の順位と歌数。

順位	歌人名	入集歌数
1	伏見院	85
2	永福門院	69
3	花園院	54
4	為兼	52
5	為子	39
6	定家	36
7	後伏見院	35
8	光厳院	31
9	徽安門院	30
10	紀貫之	28
10	俊成	28
10	進王侍	28
13	永福門院内侍	27
13	後鳥羽院	27
15	為家	26
15	儀子内親王	26
17	公蔭	24
18	為基	22
19	為相	19
20	慈鎮	18
21	後西園寺入道前太政大臣	17
21	尊氏	17
23	家隆	15
23	親子	15
23	実明女頼	15
23	後京極摂政前太政大臣	15
28	安嘉門院四条	14
28	式子内親王	14
28	順徳院	14
28	為定	14
32	徽安門院一条	13
32	西行法師	13
32	西園寺前内大臣女	13
35	伏見院新宰相	12
36	永福門院右衛門督	11
36	頼政義	11
38	直祝子内親王	10
38	寂然法師	10
38	前大僧正道玄	10
38	前左大臣(公賢)	10
38	藤原隆信朝臣	10
38	慶政上人	10
38	院一条	10

(3)風雅集入集歌数別人数

集入歌数	人数	集入歌数	人数
(首)	(人)	(首)	(人)
1	299	22	1
2	89	24	1
3	47	26	2
4	22	27	2
5	18	28	3
6	11	30	1
7	18	31	1
8	13	35	1
9	5	36	1
10	8	39	1
11	2	52	1
12	1	54	1
13	3	69	1
14	4	85	1
15	5	計	567
17	2		
18	1		
19	1		

右の(3)表からは以下の事が判明する。即ち他集に入集していても風雅集へも一首入集させた歌人は二百九十九人を算し(この中には、風雅集にだけ一首入集者も含まれる)、歌人総数五百六十七人中の比率を弾けば、実に五十三パーセントとなり、二首まで広げれば三百八十八人となるから、三分の二以上の人数を占めることになる。風雅御撰者が、たとへ一首でも撰入する事によって採択歌人の枠を広げ、二条派系撰集に対していかに引け目を見せまいと努力されたかが窺へるのである。又、(2)(3)表を併せて、十首以上の風雅撰入歌人四十五名の顔触れを考慮すれば、京極派の中核と目される歌人からは多量撰入し周辺の群小歌人からは一首でも撰入するなどして、結局は京極勢力誇示の目的の見事に達成せられてゐる事がよく判るのである。同時に、風雅集が結局は新古今集を原宗とする事、即ち二条派以上に宗祖としての新古今を尊重する事が、序文その他の記載形式面での新古今尊重態度と相まってよく理解できるのである。

第三。京極派領袖達が、その撰入歌に対してどの程度に京極派的傾向を要求したか。これは一つには京極系撰集に類同的な歌の多い事の解明にもつながるかと思はれるので、その撰歌態度について考察したい。

東野州聞書によれば、

同月(宝徳元年十月)廿二日阿州(畠山阿州持純)へ参り候処に御物語あり。

白妙の木綿つけ鳥も埋れてあくる梢の雪に鳴くなり

これは頓阿歌なり。風雅集御自撰の時、この歌を御なほしあって雪や鳴くらむとして、此集に入れらるべき由仰せくださる。御返事に申すやう、さやうになほして、此の歌を入れらるべきにて候はば、ひらに御免あるべき由かたく申しあげ、さて別の歌入れてこれは入れず。道は如此と物語あり。げにも雪やなくらむは実なき所也。

といふ話を伝へてゐる。この話は似雲の詞林拾葉にも同じ趣旨で伝へられてゐて、似雲の見解では「御自撰」とは「花園院の風雅集へ御いれなさる」ことである。原歌は積雪中で鳥の鳴く様を捻らず詠んでゐるのであるが。修正歌では、まるで雪が鳴くみたいだとひと捻りした表現に変はり、例の共感覚的表現と類似の技法となって新奇を感ぜさせるのであるが、この事は似雲によれば、原歌は「随分かすをさりすてたるもの」であったのに反して「御ものずきにて異風のこと」になるのであった。又常縁も「げにも雪やなくらむは実なき所也」と、実情そのままの表現でないことを指摘してゐる。おそらく二条派系では共感覚的な表現を、正道ならずと考へてゐたのであらう。ところで現存の風雅集では頓阿は唯一首入集してゐるところからみて、院はやむを得ず「別の歌入れてこれは入れず」とい

ふ処置を多分実行されたのであらう。その別歌といふのも雪の歌で

雪の降る日母の墓にまかりて

思ひ遣る苔の下だに悲しきにふかくも雪のなほ埋むかな

といふ歌であるが、これは例の定家の、

まれにくる夜半もかなしき松風にたえずや苔の下にきくらむ

に、場合も心もよく似通ふが故に、代歌とされたのであらう。二条派の四天王の一と称せられる人物の詠であるから、拒否にあったからとて完全黙殺もならず（それはかへって集の価値を軽くすることにもなりかねない）、かと言って自派の立場に副はぬ歌を採ることもならぬから院の御苦心の程が偲ばれる。斯様に頓阿歌でさへも修正を求められたぐらゐだから、その所属下の群小歌人に対する統制ぶりは思ひ半ばに過ぐるものがあっただらう。もっともかういふ修正の問題は南北朝期の一つの特色であらうか。例へば連歌でも、救済は師匠の善阿の句を修正して菟玖波集に入集させた記録がある。[27] 院が二条派の歌に対してかくの如き御態度をとられた事についても、実は京極派もさきに二条派から同様な仕打ちを受けた事があったからであらう。即ち花園院宸記、正中二年十二月十八日条に、

（前略）今度朕哥請之間。可遣之由思之処。永福門院御夢想先院仰之。今度勅撰不可説事也。何況先度続千載之時。両院（上皇朕事也）御哥入之次第不可説。為兼有申旨。凡今度此辺之人。雖一首不可遣哥。可為嘲哢之基故也云々。仍上皇御製不被遣之。朕又称無哥之由不遣之。永福門院御哥。又自中宮雖被申不被遣之。続千載之時永福門院御院（ママ）哥ニ

天未通女袖飜夜名々々能月乎雲居丹思遣哉

此御哥入勅撰之時。袖振夜半之風寒ミト直之。風寒。是何事哉。不可説〻〻〻。仍以故入道相国。再三此哥可被切出之由雖被仰。遂不承引。先日朕並上皇御製等申出之時。永福門院御哥直之由被咎仰。殊恐入。但撰者代々之故実也。不改意趣而直言云々。而此御哥已其意相違。所申言与意已相背如何云々。為世卿不知哥之趣。詞意不可分別之段勿論事歟。仍更不直意趣之由存之歟。不便々々

（後略）―列聖全集本―

とあるのである。つまり続後拾遺（即ち風雅集のすぐ前の集）撰進の時、花園院の御製入集を請うて来たので、遣歌する所存であったが、永福門院の御夢想に伏見院の御意向が示されたので、後伏見院も花園院も永福門院も一様に辞退なさった事を述べたあとで[28]続千載集では、永福門院の

あまつをとめそでひるがへすよなよなのつきをくもゐにおもひやるかな

といふ御歌が、第二第三句を「そでふるよはのかぜさむみ」と無断で変更されて採られてゐることを述べてあるのである。現存の続千載巻第十六雑歌上一七九五番にも変更された形で残ってゐるが、これについて花園院が憤慨され、再三切出しを要求されたにもかかはらず、二条派は御意向を無視申上げたのである。更にそれに続く記事は、花園院の慨嘆を知り得る記事である。先日続後拾遺撰進に際し、花園・後伏見両院御製の遣詠を申出てきたので永福門院歌の無断改変について、門院のお咎と訂正を申渡したが、ただ恐縮の態度を示すだけで、撰者代々の故実を理由に、門院歌の意趣は活かして表現用語だけを直したと言ふ返事をするのみであった。併し改変歌は既に門院の意趣とは違った表現に化してゐる。斯様な表現と意趣との相背を、二条派ではどう考へてゐるのか、全く為世一派の態度

は和歌の真趣を理解せざる者の態度と言ってよく、和歌に於ける詞と意、つまり表現と内容との不可分別性といふ根本精神を理解してゐない証拠だ。詞の改変は内容の改変にまで関連するものなのに、詞を改変しておきながら内容まで及ばないとでも考へてゐるのだらうかと頗る憤慨なさった記事である。

稍煩瑣な私注に堕したが、京極歌に対する二条派の無断改変の事実あることを見たかったのである。従って花園院が頓阿歌を修正の上撰入されようとした行為は、当時にあっては不当行為でなく、自派の傾向を帯びさせた上で撰入するといふ態度が一般的であった事を物語るものなのであった。むしろ頓阿歌の修正の場合は、事前了承を求め、拒否されても別歌を無修正で代用され（この事は院の「詞意不可分別」の主張を活かす方法である）撰入せられた点、対照的で注目される。が併し、かういふ撰歌態度がひいてはその集に一種の偏向性を帯びさせる原因であったことも留意しておかねばならぬと思ふ。

以上、京極派の内部に於ては、その指導者層により「詞意不可分別」に牴触せざる限度に於て、一つの粉本的原歌を模範として、相当の統制力ある詠作練習が課せられたる痕跡の存する事、その結果対二条歌風に於て生新な一面を発揮し得てマンネリズムは打破せられた反面、自派内部で類同歌の多発といふ別の一面の生ずるの已むを得なかった事、かつその傾向の回避は、当時の歴史的特徴である正閏抗争に深くかかはりを持つものであった為、頗る困難であった事、等を展望してきたのである。ともあれ、二条歌壇に拮抗する為に、京極派勢力の拡大方策として採られた歌人群や歌数の量大化と歌調の類同性は、京極歌風を評価する時看過できぬ一面であるが、漢詩や連歌といふ文芸になれた当時の知識人にとっては、京極派の所謂生新な一風といふものも現代人程には生新とのみ映じなかったのでないかと言ふ事、および斯様な類同性の問題は、中世文芸の一特性たる「型の文芸」にも通ずる側面があるかと思はれるので、その点いささか強調に堕したかと思はれるが、論述した次第である。

注

1 例へば、「（玉葉集の）文学史意義は、二条家嫡流の撰者の手になる先行勅撰集の、よくいえば温雅な、その半面は平板なマンネリズムに反旗をひるがえして、生新な一風を立てているところにある」「（風雅集の）文学史的意義は、ほぼ玉葉集の延長線上にあると見ていいが、風雅集は玉葉集よりも、とくに自然描写的な面では、一層繊細な感覚をもち、一段と洗練された詩美をねらうようになっている」谷山茂・新歴代文学選中世篇解説（白楊社）
2 小西甚一・中世文学の世界所収・玉葉集時代と宋詩（岩波書店）
3 稲田利徳・正徹の共感覚的表現歌の系譜（国語国文三八八号）
4 岩佐美代子・玉葉風雅表現の特異性（国語と国文学五四七号）
5 日本の詩歌（創元社）
6 光厳天皇遺芳（常照皇寺刊）
7 玉葉と風雅（弘文堂アテネ文庫）
8 鎌倉室町秀歌（春秋社）
9 前掲注2に同じ
10 例へば「白鷺飛翔の景を詠むのは当時一部の歌人の趣味に殊の外かなったと見えて（鷺は一体によく詠まれてゐるが）……」上田

英夫・玉葉風雅集講義（改造社短歌講座・撰集講義篇所収）

11 白鷺の歌（国語国文四〇六号）

12 前掲注7に同じ

13 同右

14 花園院御製謹抄・花園天皇の御芳躅所収（妙心寺刊）

15 前掲注8に同じ

16 前掲注10に同じ

17 土岐善麿・訳注為兼卿和歌抄（初音書房）

18 前掲注14に同じ

19 前掲注8に同じ。但しそこでこの二首を風雅集歌と誤認。事実は二首とも玉葉集歌。

20 前掲注14に同じ。

21 「見ゆ」の世界（国語国文三六一号）

22 井蛙抄巻六雑談に作者不詳歌「さとの犬の声するかたをしるべにてとがむる人にやどやからまし」があるが、㋐歌の訛伝かと思へるくらゐ近似し、頓阿が「是はさして庶幾せらるべき体とも覚え侍らぬ」と評してゐる点から考へて京極派の歌かも知れぬ。同じ基盤より発生した歌とも考へ得る。

23 私の調査した歌集を示す。数字は国歌大観番号。古今727・新勅撰855・続古今1232・新後撰285 1219・玉葉784 1202 2194・続千載1566・風雅906 908・新千載199 667 1629・新後拾遺891 1248・新続古今918 1103 1484 1492 1493 1811・拾遺愚草員外12255・権中納言定頼卿集24541・新葉集977・桂宮本為家卿集・桂宮本慈道親王集

24 日本古典文学大系・連歌集（岩波書店）。伊地知鉄男頭注

25 万葉集注釈・万葉集私注

26 新古今的なるものの範囲

27 「善阿が風体は古体にて、救済一向是を用いず、其内に少々よきもあれ共、筑波集の時十一句入たるが皆ちとは直したる也、師匠の風体なを斯のごとし、況んや他人をや」（良基・十問最秘抄、五問の答）

28 現存の続後拾遺には、新院（花園院）御製として三首、院（後伏見院）御製として七首、永福門院が二首採入されてゐるが、宸記を信ずる限り現存歌は原歌のままか否か疑はしく、撰者の恣意が働いてゐると見るべきであらう。この時期の勅撰集歌の取り扱ひはこの意味で慎重に扱ふ要があるかと思ふ。

本稿は昭和四十四年十一月二十三日、竜谷大学に於て開催された中世文学会秋季大会で口頭発表したものに、若干補筆又は削除したものである。当日御指導下さった諸先生に厚く御礼申上げる。

（大阪府立勝山高校教諭）